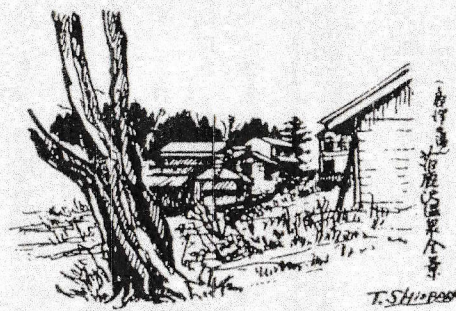




鹿沢温泉全景

あまりにも効能のいちじるしいのを感じた親王は、それより後は都へ帰らずに、角間峠を越えて、暖い信濃国の小県郡弥津村に住居を定めて永住するようになりました。そして夏は峠を越えて鹿沢の湯に入浴することにきめました。鹿沢の王湯というのは親王に因んだからだそうです。後に貞保親王の子孫が、滋野氏を称し、信濃の滋野源氏の祖となったのです。

滋野氏は、彌津、海野、望月の三家に分れまして、それぞれ北信地方の土豪となり、勢力が増大して、やがてこの地方の支配者となりました。真田幸村で名高い真田氏もこの海野氏の出であります。

海野氏はやがて、今の婦恋村、長野原町一帯の浅間山麓を領有して非常な勢力を張りました。

鹿沢温泉は一名「山の湯」「彌津の湯」ともよばれて、長い間信濃国分になっていましたが、国境争いの結果で上州側に入ったものです。

鹿沢温泉の発見については、更に一つの伝説があります。むかし土地の狩人が、鹿を追ってやがてこの深山に入ってきた

けれども、人間のたくましい力が、たとえ一部にもせよ、この巨大な深山の原始林にいどみかゝったということだけでさえ愉快ではありませんか。

一五、湯煙の中の鹿

(吾妻郡・鹿沢温泉地方)

むかし孝徳天皇の御代、白雉元年の頃、都に舞楽の管絃職を奉仕していた貞保親王という方がありました。ある日宮中の高台に居りましたが、その時に燕のために眼に汚物が入ってしまい、ひどい眼疾にかゝりました。手を加えて見たがなかなか思う様になおりません。ところがある日の夢に「信濃国浅間山の裏に不思議な温泉があるから、そこにいて眼を洗えばきっとなおることである」

との告げがありました。喜んだ親王は、さっそく都を立て、はるばると信濃国に向きました。いろいろとたずねた挙句、上州側にまで来て、ある谷間に、沸々と湧く湯を発見いたしました。今更のように驚喜して、こゝにとゞまり、眼疾をいやすために入浴いたしました。夢の告にたがわず、さすがの眼疾もすっかり全快しました。これが「鹿沢の湯」の発見だそうです。

ました。すると谷間の草深い中に、手負の鹿がいて、しきりに耳を動かしてあたりに気をくばりながら水に浸っています。

「しめた、一発で仕とめようか」

と思つて近づくと、水と思つたのはあやまりで、ほのぼのと湯気が立ち昇っているのです。

「ははは……これは鹿の奴こゝで疵をなおしているのだな」と思つて更に近くよつて見たが、鹿は疵のためにあまり逃げようとしません。獬師は可哀想なのでそのまゝ帰つたでしょう。その後ゆく度毎に見ますと鹿はもうすっかりなおつてその後姿は見せませんでした。これから鹿沢の湯と名をつけられたそうです。

一六、山上の光

(吾妻郡・鹿沢温泉地方)

上・信の国さかいに近い山奥に、こんこんとわくいで湯、そのいで湯の暖かそうな煙りはほのぼのとしたなにか神秘的でありました。その湯に近頃高い山の峯から、サツと明るい光りがさして、十分湯に入れるようになりました。人々はふしぎな思いで

「一たい何の光りだろう。めぐみ深い暖い光りだ。少しも魔性のこわさが無い」

「そういえばほんとに何ともいられない慈悲のめぐみをたたえたようだ……」

と、ふしぎはふしぎをうんでゆきました。それでは一つ占いに見てもらおう——ということになつて、巫子(みこ)に頼みました。温泉の精である湯の花をとつて、これを神前にそなえて、しばらく巫子は祈りをつづけていましたが、やがてその口から神の御告げがもれてきたのです。一同はかしこまって聴き入りました。



鹿沢温泉丸山裏山にある薬師堂

「我は是れ東方の薬師如来であるぞ。されば多くの衆生を、生・老・病・死の四の苦より救うのだ。四苦のために現世には身心をなやまし、未来には地獄に陥落する。それをあわれみと思うが故に、自分は昔より誓願を起して、衆生の病苦を助け、寿命長穩の医薬を与え、現世の身心を安らかにして、未来の苦しみを救い、極楽世界にゆかしめんと願うために薬師という号を賜つたのである。今自分のはからいをもって、ここに熱湯を現したの